
メイドのみやげはどうですか！！

世我 作人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドのみやげはどうですか！！

【Nコード】

N8349Y

【作者名】

世我 作人

【あらすじ】

「ある日、引きこもりがメイドになった！」

宮下四葉^{みやげよつば}は男である。しかし、とんだ勘違いで、世界財閥ご令嬢のメイドに――！

女装メイドと男嫌い女好きなお嬢様、そして、個性豊かな人々が紡ぐ、

ばれたら死、逃げてでも死、な崖ぶっちコメディー！

プロローグはどうですか！

「紅茶をお持ちしました。お嬢様」

豪華な雰囲気、豪華な空気、「お金持ちってこつゆところに住んでいるのだろう」と考える凡人のイメージを絵にでも描いたような部屋に、一人のメイドが入って行った。

「あら、もうそんな時間？　ありがとう、四葉^{よつば}」
まるで人形のような少女がメイドを出迎える。

「いえ、わたしはお仕事なので」

「いいじゃない、あなたは私のメイド。どう？　一緒にお茶しない？」

「いえ、ですから仕事ですので………て、どこ触っているのですか！……！」

「いつ見ても四葉はかわいいわ。その涙ぐむその顔、食べちゃいたいくらい」

そう言う「お嬢様」と呼ばれていた少女は四葉に顔を近づける。

「やめてください、お嬢様！！」

四葉は顔を赤くして少女を押し退けると、全速力で部屋を出て逃げた。

「あつ、どこ行くの四葉！　四葉~~~~~！！！！　ちっ、逃げられたか……」

逃げる途中、四葉は少女の舌打ちが聞こえたような気がした。

「は……は……、危なかった」

逃走にどうにか成功した四葉は、廊下の壁にもたれるようにしゃがみこんだ。

「それにしてもメイド服って、フリフリが邪魔で走りにくいな……」

「メイド服を馬鹿にしてはいけませんよ」

どこからともなく、どう見ても執事にしか見えない男が現れた。

「氷柱崎さん……」

「いいですか、メイド服を馬鹿にするものは、メイド服に泣くという言葉があります。」

君には、主人に仕える者の正装の意味をまだ理解できていない、だから――！

この私、氷柱崎アイデスタスが2時間二人で……」

「そんな言葉は聞いたことないですし、メイド服についての講習会を受けるつもりはありません！！！！」

氷柱崎が正気に戻る。

「大変迷惑をかけた、実は一つ君に言い忘れたことがあって探していたところだった」

「戻るの早！！ん？ 忘れていたこと？ なんですか？」

四葉は首をかしげた。

「まあ、契約上の注意事項の一つなんだが……、簡単に言うとお嬢様に君の正体がばれたら、君が死ぬということだ」

「へー、ぼくが死ぬんですか。………………。ぼくが死ぬ？」

四葉の体がふるえだす。

「じょ……冗談はやめてくださいよっ！ はは……ははは……」

「冗談ではない、本当のことだ」

「マジ、ですか」

「マジだ」

「じゃ……じゃあ、ぼく……この仕事やめさせていただきます……！！」

「それは無理だ」

四葉の目の前に氷柱崎は一枚の紙を突き出した。

「この契約書があるかぎり君はやめることができない」

「でっ、でも、人の命がかかっているんですよ！ いくらなんでも……」

「もし、君が逃げたとして。そうなれば、お嬢様は血眼になっ

て探し出し、君を処刑するだろう」

「結局死ぬ運命なんですか……！」

「メイドとしてここで働き、ばれて死ぬか。それとも、今から逃げ、捕まって死ぬか。」

私はできれば最初のやつをお勧めします」

氷柱崎は微笑んだ。

「うう………」

どうしてこうなってしまったのだらうと、うめく四葉であった。そして時は、約半日ほど遡る……

突然の通達はいかがです？

およそ
約半日ほど前……

「んっ……」

仕掛けた覚えのない目覚ましに起こされた…。

正直まだ眠い、一度寝しようかな…。

「8時か…」

ぼーんとしていても、時計の秒針はカチカチと動く。

まあ、今のぼくには時間なんて関係ない。

ぼく——宮下四葉は、みやげよつば 16歳にして自由を手に入れたからだ。

家族は今、海外で仕事をしている。

そして、その両親たちの仕送りで生きている。

昔のぼくは学校に通っていた、そのころは、学費だの生活費だのと節約の毎日だった。

でも、今のぼくは学校に行っていない。

あることがあつて今は行っていない…。

とりあえずは休学として処理されているみたいだ。その証拠に、時折、学校からプリントやらが届く。

まあ、そんなおかげで仕送りもそれなりに自由に使っている。

「あれからもう半年になるのか……」

いろいろと思いにふけていると眠気がどこかにいつてしまった。

布団から這い出すと一度ぼくは周りを見る。

今まで気にしていなかったけれど、散らかったゴミ、山積みの雑誌なんか、ぼくの半年の引きこもり生活を物語っていた。

「あとで……片付け、しようかな……」

あとでか…、思い出せないけどいつもこの言葉で物事を解決しているような気が…。

特に、この生活を始めてから一番多く使っている言葉かもしれない。

ぎゅ〜〜〜…

腹の虫がなった。

「確か、冷蔵庫に何か食べ物があつたはず…」

まだどこか、だるさの抜けていない身体^{からだ}を無理やり起こすとぼくは台所へ向かった。

さすがに半年間引きこもりをしていたといえ、完全に外の世界と独立することはできない。食べ物もその一つだ。

でも、近所のコンビニやスーパーは、死んでも行きたくない。もし知り合いに会ったとき、「こいつ引きこもりしてるんじゃないか」などと思われたくないし、そもそも集団で同じ空気を吸いたくないという自分流の引きこもりのプライドがあるからだ。

それでも食べ物は手に入れないと餓死してしまう。

世の中は便利になった。引きこもっていてもインターネットを使えば何でも手に入る。

今のぼくは金銭面は不自由してないから何でも好きに買える。一昔前に生まれていたら、とつくに死んでいたかもしれない。

ガチャツ キー…

台所に着いたぼくは冷蔵庫を開いた。

「食パン2枚とマーガリン…」

神はぼくに朝はトーストにしろと…。

とりあえず、食パンを取り出しオーブントースターに入れて5分にタイマーを合わせる。

「食料…また注文しないといけないな…」

食べ物が無くなったのは確かに問題だ。しかし、それはあくまでも昔のぼくの話。

今のぼくには、「十分すぎるほどの生活費がある!!」
静かでオーブントースターの音以外聞こえない部屋の中ぼくの声

が響いた。

ブルルルルルルルルルルルルルルルル

突然、台所隣にあるリビングから電話機の呼び出し音が鳴った。急いで取りに行く。

こんな朝早くいつたい誰だろうか。

ガチャツ

「もしも、宮下ですが……」

「四葉ちゃん？四葉ちゃんなの？」

この聞き覚えのある声は……！

「そうだけど……でっ、久しぶりの電話だけど、何の用？　母さん」

声の主は、海外にいる母からだった。

『もちろん！　かわいい我が子の生存を確かめるためによ！　大丈夫？　半年間、一人ぼっちだったけど死んでないわよね！？』

「朝っぱらからいきなり電話してきて、死んでないか？　って久しぶりに話す息子に対しての言葉か……！」

『あら！ そっちは朝だっけ！ ママ忘れてたわ。ごめんね、四葉ちゃん。こっちは昼だから、

ところで、死んでないわよね？」

誤るところそこ————！？　しかも、ぜんぜんぼくの話の聞いていない！！！！

「ぼくはうさぎみたいに、ストレスには弱いし、死んでたら電話に出れないでしょ！」

「わからないわよ。今の幽霊、インターネット使えるって聞くし」

どこの世界の幽霊だよ…。

どうしてこう、母さんとの会話は会話として成り立たないのだらう。

四葉ちゃん

「今度は何？」

『ご飯、しっかり食べてる？』

今頃そこかよ…。

「うん、とりあえずは食べているよ。正直、この話題もう少し早くいつてほしかった…」

『あら〜ごめんなさいね。ママ、ちよつと天然だから〜』

自分で天然つて、言ってるよ。この人…。まあ、「天然」と自称するほど天然なのは、息子である自分がよくわかっているけど…。

「もう用は、それだけ？ 電話切るけど」

『あー！！ ちよつと待って！』

「待てつて、まだ何かあるの！？」

本当のところ早く電話を切りたい、母さんのちよつと待つては大抵、嫌なことが起きる。

幼稚園のときは、それで漏らしてしまったし、小学校は風邪を引かされ、中学校は修学旅行に置いてかれた。

言わば、母さんの「ちよつと待つて」は、ぼくのトラウマだ。

『パパからの伝言』

「父さんからの伝言？」

今回ののは大丈夫そうだ。

『学校を休学して引きこもっている人間なんか金を出せない！自分で働け！ だつて』

前言撤回。

「金を出さないつて、仕送りのこと！？」

『ん〜、そうゆーことみたい。あつ！ もう仕事の時間！！』

また元気でね〜！！』

「えっ！？ ちよつ、母さん！！」

ガチャツ ツーツーツーツー

ぼくは床に頂垂れた。

ぼくの自由が崩壊した…。

この先、どうして行こう…。

チーーン とオーブントースターのお知らせ音が鳴る。

ぼくは中の食パンを取り出した。少しコゲた食パンにマーガリンを塗っていく。

父の伝言が頭の中を過ぎ^よった。

「働けか……」

マーガリンの所為^{せい}か出来上がったトーストは、かなり塩辛い気がした…。

突然の通達はいかがです？（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

こういうことは初めてなので、文などに間違い等ありましたら、感想や評価など、ドシドシ送ってください。

できるだけ、よい作品にできるようにがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349y/>

メイドのみやげはどうですか！！

2011年11月26日17時48分発行